三多摩青年合唱団＆第41期研究生

あめあがりコンサート2007

客演指揮　高浪 晋一

振付・踊り・三線　具志 幸大

指揮　杉森 俊幸

ピアノ　笹 有理子・峯崎 道子

三多摩青年合唱団

三多摩青年合唱団第41期研究生

武蔵野市民文化会館大ホール

2007年9月28日（金）午後7時開演

沖縄のスケッチ

～混声合唱、三線と二台のピアノのための

寺嶋陸也 曲

谷川俊太郎 詩（私たちの星）

指揮　杉森俊幸

ピアノ　笹有理子　峯崎道子

振付・踊り・三線　具志幸大

あかなー

はららるでぃ

だんじゅかりゆし

私たちの星

久高（くだか）

赤田首里殿内（あかたすんどぅんち）

唐船（とうしん）どーい

『沖縄のスケッチ』　混声合唱、三線と二台のピアノのための　　寺嶋陸也

日本やアジアの文化や芸術、そして歴史を考える上で、沖縄は非常に重要な鍵となるところである。なかでも平和について考えるとき、広島や長崎と同様、日本人にとっては、(もちろんアメリカ人にとっても、であるはずだが)忘れることのできない場所でもある。

歌を歌い、踊りを踊ることが単なるゲームに終わらずに、一人一人が「伝承」を担う者として存在できるように・・・そこで一緒にいる人に伝える意味と、次の世代にそれを伝えて残す、ということの両方の意味で・・・という願いから誕生した『沖縄のスケッチ』は、2005年に初演されたＮＨＫ東京児童合唱団の委嘱作品で、児童合唱のほかにテノールの独唱が加わる７曲からなる組曲だが、2006年に混声合唱のための版と女声合唱のための版が作られ、混声合唱版の全曲初演は、2007年の1月に栗山文昭指揮の千葉大学合唱団、浅井道子と作曲者のピアノ、具志幸大の振付と踊りによって行われた。

第１曲「あかなー」　「あかなー」は、沖縄本島にいる妖怪で、真赤な髪で顔も見えないほど小さく、こどもたちに好かれ、夕やけになるとこどもたちはあかなーのことを思い出してこれらの歌を歌うという。沖縄本島のわらべうた2曲が使われている。

第２曲「はららるでぃ」　与那国島の子守唄2曲にもとづく。「はららるでぃ」とは、こどもを寝かしつけるときのはやしことば。

第３曲「だんじゅかりゆし」　もとは船出に際して海上の平安を祈る歌で、今では舟にかぎらず旅に出る人の無事と健康を祈り、旅立ちを祝福して歌うようになった、沖縄本島の民謡。はじめに歌われるゆるやかな部分と、出港のときに歌ったという速い部分との2部からなる。

第４曲「私たちの星」　谷川俊太郎の詩に沖縄の音階に似せたメロディーをつけた。組曲全体のテーマを象徴する間奏曲。

第５曲「久高（くだか）」　沖縄本島の民謡。久高万寿主（くだかまんじゅしゅ）という遊び人のことを面白おかしく話してきかせる内容の歌で、そのストーリーもところによりさまざまに伝承されている。エイサー（旧盆に、太鼓や三線にあわせて踊り、歌いながら練り歩く沖縄の伝統行事）で使われる代表的な曲でもある。

第６曲「赤田首里殿内（あかたすんどぅんち）」　沖縄本島のわらべうたにもとづく。本島南部の首里の三つの神殿のうちの一つが「赤田殿内」で、この歌の前半は赤田で「弥勒まつり」という豊年祭の行事の歌だったらしく、「あかなー」というわらべうたと同じメロディーである。歌の後半「シーヤープー」などのはやしことばの部分は、こどもや赤ん坊を遊ばせる歌。

第７曲「唐船（とうしん）どーい」　沖縄諸島全域でもっとも良く知られた歌。カチャーシーという自由なふりつけで踊られる踊りとともに演奏されることが多く、歌詞も踊り同様にその場で即興的に作られ、歌詞に応じて旋律もいろいろに変化するのが本来の形である。テンポが速く盛り上がるので、宴や祭りの最後のほうで踊られることが多い。

なお、沖縄民謡の資料としては、日本放送協会編の「日本民謡大観」（日本放送出版協会）、杉本信夫編の「沖縄の民謡」（新日本出版社）を主として参考にした。

たのしい混声合唱曲集「各駅停車」

客演指揮　高浪晋一
ピアノ　峯崎道子

秋風わたれば	高浪晋一 詞 曲
各駅停車	菊池勲 詞　高浪晋一 曲
名刺がわりに	古内美也子 詞　高浪晋一 曲
赤とんぼ	三木露風 詞　山田耕筰 曲　高浪晋一 編曲
雨	玉川学園中等部 詞　高浪晋一 曲
ともだちはいいな	藪下和雄 詞　小山章三 曲
夏の思い出	江間章子 詞　中田喜直 曲　高浪晋一 編曲
私の贈り物	西岡典昭 詞　堀口海 曲
世界中の人に	渡辺史明 詞曲　高浪晋一 補修
日本の歌	長井桃子　詞曲
たのしいね	山内佳鶴子 詞　寺島尚彦 曲　高森義文 編曲
われら愛す	芳賀秀太郎 詞　西崎嘉太郎 曲　高浪晋一 編曲
翼をください	山上路夫 詞　村井邦彦 曲　高浪晋一 編曲